



OUIK Newsletter

2018年1月号

2018年 新年のご挨拶

2018年、明けましておめでとうございます。旧年中は、沢山の方々、団体と新たに連携の機会を頂けたことを感謝申し上げます。本年も、自然共生社会、豊かな地域社会に向けた研究活動を通じて石川、金沢への貢献を行っていきたく存じます。

2018年は国連大学サステナビリティ高等研究所（UNU-IAS）いしかわ・かなざわオペレーティング・ユニット（OUIK）にとって設立10周年という節目の年となります。これまでの10年間、里山里海研究、生物文化多様性に関する研究を通じて国際発信や政策提言を様々な形で行ってきました。そしてこれからの10年を考えると、OUIKにとって「地域にある国連機関としての役割」を真摯に考えることが大変重要になってくると思います。

昨年私が金沢でお会いした方々の中で、偶然にも複数の方が、「青い国連旗が石川の地にはためいていることに大きな意味がある」とおっしゃっていました。私自身、大変腑に落ちた言い回しでした。昨今の世界情勢を鑑みるに、平和、危機的な地球環境の保全、安全安心な生活、そして将来に希望を持てる社会づくりのためには、地域社会だけでなく地球社会が一丸となって取り組むべき課題が山積しています。しかし同時に、これら一つ一つの課題に対して裾野から変革を起こしてゆけるのも、また地域からなのです。

2015年9月に国連持続可能な開発サミットで、2030年の達成を目指した持続可能な開発目標（SDGs）が採択されました。2015年をターゲットに国連が実施してきたミレニアム開発目標が主に途上国の貧困や飢餓を解決対象としていたのとは異なり、17項目からなるSDGsは先進国を含む国連加盟国すべてが達成することを期待されています。日本政府も、2016年SDGs推進戦略室を設置しSDGs達成のためには地方創生の実現が鍵となる、としています。

地域社会を経済、環境、社会的な側面から持続可能にしていくことは地方創生の本質であることは間違いありません。そしてそれが地球の持続可能性、国際社会が掲げる共通目標であるSDGsに貢献することが明示的に示されたのです。国連旗がはためくこの石川は、地域の持続可能性を高めることで地方創生のさきがけとなり、それらを通じてSDGsへの国際的な貢献につながる地方モデルを示すことができるのではないのでしょうか。この大きな目標を視野に入れながら、今年も活動を進めていきたく存じます。

国連大学サステナビリティ高等研究所

いしかわ・かなざわオペレーティング・ユニット 所長 渡辺綱男

目次

第1回アジア生物文化多様性国際会議開催1周年記念 国際フォーラムの開催.....	2
・第1回：生物文化多様性と SATOYAMA-自然共生社会を目指す世界各地の取組を知る-	2
・第2回：生物文化多様性を次世代が継承するために-東アジアの連携を考える-	3
2017年下半期のトピック	4
・世界農業遺産を軸とした地域発の国際貢献プログラムの発足.....	4
・ブラジル、マレーシアからの研修視察受け入れ	4
・金沢におけるSDGs推進のための産官学連携に署名.....	5
・第1回『LGBTと教育フォーラム』IN金沢：SDGs「誰も置き去りにしない」から考える地域コミュニティにできること.....	5
生物文化多様性と持続可能な都市金沢	6
・金沢市の生態系サービスと地域社会のレジリエンス向上プロジェクト	6
・暮らしと自然と文化的景観国際シンポジウムの開催（金沢大学地域政策研究センターとの共催）	7
・生物多様性市民モニタリングに関する勉強会	7
2017年7-12月（下半期）の活動実績.....	8

第1回アジア生物文化多様性国際会議開催 1周年記念 国際フォーラムの開催

2016年10月、石川県、七尾市、ユネスコ、国連大学、生物多様性条約事務局がアジアでは初めてとなる生物文化多様性に関する国際会議を開催し石川宣言を採択しました。開催から一年が経ち、宣言の実施に向けた国際フォーラムを2回シリーズで内外のパートナーと開催しました。

◆ 第1回：生物文化多様性と SATOYAMA-自然共生社会を目指す世界各地の取組を知る-

金沢市 2017年10月4日

里山イニシアティブ国際パートナーシップ (IPSI) の運営委員会の石川開催に合わせ、世界各国で SATOYAMA がどのように維持され、その中で生物多様性と文化多様性の関係がどのように、人々の生業に役立っているかを議論しました。湯本貴和氏 (京都大学霊長類研究所所長) が日本発の「SATOYAMA」という自然共生社会の概念が国際的にどのように理解、実践され得るか、また日本の里山の歴史やこれからの課題などを概観しました。続いて IPSI 運営委員会議長のアルフレッド・オテング=イエボア氏 (ガーナ生物多様性委員会議長) が、IPSI の活動理念とガーナにおける生物文化多様性の事例紹介を行いました。



世界各国の事例紹介ではア Nil・クマル氏 (M.S.スワミナサン研究財団所長)によるインドの稲作種の伝統的多様性を保全し持続可能な消費につなげる取組、センカ・バルダノヴィック氏 (サラエボ大学)からは、東ヨーロッパにおける生物多様性と文化多様性の繋がりが、国が分断されてきた東ヨーロッパの人々のアイデンティティを支えてきた側面など事例を通して紹介されました。

フィールド視察

シンポジウムに先立って行われたフィールド視察では、能登で育まれてきた伝統文化が、どのように地域固有の地形、気候、生態系などの自然と人々の生業をつなぎ進化してきたか、そして人口減少など現代の社会的変化に対応す



るために、地域の人々が行っている取組を視察しました。輪島キリモト桐本木工所では、150年受け継がれてきた輪島塗の制作工程を紹介いただくとともに、グローバルマーケットへの進出戦略、異なる用途品への応用、また漆器が持つ食品や健康への良い作用について協働研究を進めていることなどを三代目の桐本泰一氏から説明を伺いました。また地域での漆生産量を確保するために漆の植林を林業者の方と協力して行っており、植林の現場で漆の掻き方や使用される道具などを見学しました。



続いて奥能登塩田村を訪問し、海水を汲みあげ、砂と日光を利用してかん水と呼ばれる濃縮塩水をつくり出す伝統的手法の揚げ浜式製塩の生産現場を視察しました。一時は薪燃料を止め廃棄物を燃料として使用していた時代もあったそうですが、里山からの資源である薪を使うことで里山と里海の繋がりを維持する持続可能な製品づくりを目指し、薪燃料で一昼夜かん水を炊くことなどを説明いただきました。一行はその後千枚田を訪れオーナー制度などの管理について千枚田愛耕会の堂前氏から説明を受けました。

◆ 第 2 回：生物文化多様性を次世代が継承するために-東アジアの連携を考える-

金沢市 2017 年 10 月 15 日

シリーズ 2 回目は、国際自然保護連合日本委員会 (IUCN-J) と共催し、生物文化多様性をどのように次世代へ受け継いでいくか、日中韓の IUCN 委員とユース参加者と考えました。

吉田正人氏 (筑波大学) による基調講演では、自然と文化の相互関係について、国際的な制度も含めてお話を頂きました。

第 1 部では、日本、中国、韓国の生物文化多様性の事例が紹介されました。UNU-IAS OUIK の飯田義彦研究員が、石川県の生物文化多様性に関する取組と課題について述べた後、地域主体の生物文化多様性保全に向けた「多様性」アプローチの重要性を指摘



しました。官秀玲氏 (中国林学会) からは、中国のオーク林管理の事例に関わる発表があり、ホン・スンキ氏 (モクポ大学島嶼文化研究所) は、持続可能な発展のために、島嶼の生物文化多様性グローバルレイニシアチブの必要性を唱えました。安藤よしの氏 (ラムサール・ネットワーク日本) から、田んぼの生物多様性を向上するための活動 (田んぼ 10 年プロジェクト) について紹介がありました。第 1 部の質疑応答では、森林の管理・保全方法、U 字溝や除草剤の使用と田んぼの生物多様性の保護、個々の学びの「繋がり」の構築、自然と生活の両立、生物文化多様性と地域の活性化、法制度の問題など、会場から様々な質問が挙がり、日中韓の様々な視点から議論されました。

第 2 部の質疑応答では、第一次産業が若者にとって魅力的なものになるにはどうあるべきか、ユース参加者が議論しました。十分な対価を得られる制度の必要性や社会的ステータスの向上のほかに、消費者として産地や生産方法を選んでいくことなども挙げられました。また、次世代に自然と文化を引き継いでいくための若者の繋がりを点から面へ発展させていくための活動をどのように展開していくことができるのか等についても議論されました。

最後に、堀江正彦氏 (IUCN 理事、外務省参与・大使) が、若者が既に行っている心強い活動を広げていくことの大切さ、生物文化多様性の認知度を高め主流化していくことの大切さ、国際社会が結束し協調することの大切さについて言及しフォーラムを総括しました。

フィールド視察

今回のフォーラムに先立ち、日本、中国、韓国から 31 名がフィールド視察に参加しました。

輪島市三井町のまるやま組を訪れ、主催する建築家の萩野紀一郎氏とデザイナーの萩のゆき氏、そしてその活動に協力する金沢大学の伊藤浩二氏から、地域の伝統や文化と生物多様性の繋がりを守り、次世代に継承していくための様々な取組を伺いました。萩野紀一郎氏からは能登に移住した経緯や活動内容について紹介がありました。萩のゆき氏からは地域の伝統行事であるアエノコトを生物多様性に感謝する行事として独自にアレンジし、多様な参加者と共に毎年実施していること、地域の知恵や文化、生物多様性をまとめた歳時記などの冊子や教材を自ら作成していることが紹介されました。伊藤氏からは、まるやま組の活動が始まるきっかけとなった金沢大学の里山里海マイスタープログラムや、まるやま組で毎月実施されている植物モニタリングの取組について紹介がありました。

参加者は、一般の参加者や子どもたちにメッセージを伝えるための創意工夫に富んだプログラムや教材に感心し、手づくりの人形や冊子を、実際に手に取りながら熱心に質問をしていました。視察後には、まるやま組のような取組をぜひ自国でも始めたいという声に参加者から聞かれました。

次に、白米千枚田を訪問し、この場所に棚田が作られた経緯や棚田景観を守るために実施されているオーナー制度の仕組みなどについて説明を受けました。その後千枚田を散策し、参加者は海辺の美しい棚田の景観を存分に楽しみました。



✦ 世界農業遺産を軸とした地域発の国際貢献プログラムの発足

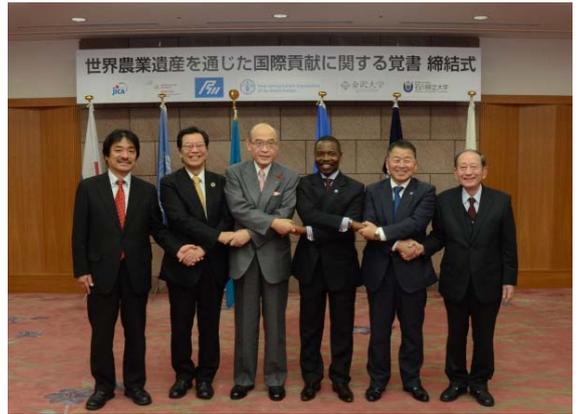
金沢市、2017年10月20日

石川県、金沢大学、石川県立大学、国連食糧農業機関（FAO）、JICA 北陸支部そして国連大学サステナビリティ高等研究所が「いしかわ世界農業遺産国際貢献プログラム」に関する覚書に署名しました。

2013年の世界農業遺産（GIAHS）国際会議では、能登コミュニティにより先進国 GIAHS と途上国 GIAHS の関係を強化していくことが提案され、石川県は、翌 2014 年から、能登の里山里海の保全と利活用、地域づくりを研修するプログラムを立ち上げ、これまで、ブータン、インドネシア、ラオスなど 6 カ国から研修員を受け入れてきました。

今般、この事業を発展させ、能登の里山里海における「持続可能な地域づくり」を、途上国からの研修員が現場で学び、

またその研修への貢献を通じて能登地域もグローバルな持続可能性の価値に気付ける、双方に学びをもたらすことを狙った国際貢献プログラムが発足しました。プログラムには FAO、JICA 北陸支部、金沢大学、石川県立大学、石川県、そして国連大学サステナビリティ高等研究所が研修実施機関として参加します。OUIK は、これまでの GIAHS における研究成果や知見、ネットワークなどにより総合的にプログラムをコーディネートし、GIAHS 認定を目指す地域のみならず、持続可能な地域づくりを広く途上国のパートナーと共有し、地域間の学びあいを強化していきます。



（左から）仁田 JICA 北陸支部長、竹本国連大学サステナビリティ高等研究所
所長、谷本石川県知事、ポリコ FAO 駐日連絡事務所所長、山崎金沢大学学長、
熊谷石川県立大学学長

✦ ブラジル、マレーシアからの研修視察受け入れ

この国際貢献プログラムの第 1 弾の研修として、FAO 派遣によるブラジルからの研修員を受け入れました（2017 年 11 月 29-30 日）。研修員はブラジル政府、自治体、そしてコミュニティの実践者からなる 9 名で、東京での GIAHS に関する座学、岐阜での視察、そして能登で農業の 6 次産業化を道の駅のと千里浜で、地域の生業づくりを春蘭の里で、それぞれ視察と意見交換を通じて学びました。最終日の円卓セッションでは研修員がブラジルの GIAHS 候補地を紹介し、認定に向けた意見交換を行いました。今回の研修には FAO ローマ本部より遠藤 GIAHS プログラムコーディネーター、FAO 駐日連絡事務所よりポリコ所長、三原副所長も参加され、GIAHS サイト間の学びあいの可能性に大きな期待を表明しました。



同じくプログラムの枠組みでマレーシアサバ州から GIAHS に関連する 4 省庁からハイレベル視察団を受け入れました（2017 年 12 月 10 日 - 15 日）。能登ワインや輪島市三井の里山ホテル構想を通じた地域づくりなど、GIAHS の活用事例を中心に視察を行いました。サバ州は世界自然遺産、ユネスコエコパーク、ラムサール条約湿地などすでに国際認証制度に関する実施経験も豊かで、政策決定者として地域の生業づくりの視点から視察受け入れ先とも有意義な議論を持つことが出来ました。

◆ 金沢における SDGs 推進のための産官学連携に署名

金沢市、2017年8月30日

OUIK は、公益社団法人金沢青年会議所(金沢 JC)、金沢工業大学(KIT)、JICA 北陸支部(JICA)と、金沢における SDGs ビジネスを推進する枠組み構築を協力しながら進めるための覚書に署名しました。

締結式では、既に SDGs 達成に向けた取組を積極的に行っている各団体が、連携を通じた SDGs の更なる可能性について言及し、その意気込みを語りました。渡辺 OUIK 所長は、地域での草の根の活動が世界を動かしていく原動力となると述べ、SDGs をテーマとした産官学連携の新しい試みに大きな期待を寄せました。

石川発のこの活動の成果が、全国、そして世界の SDGs ビジネスの推進につながるような活動を目指します。



(左から) 仁田 JICA 北陸支部長、渡辺 OUIK 所長、大澤金沢工業大学学長、塚本金沢青年会議所理事長

◆ 第1回『LGBT¹と教育フォーラム』in 金沢 ～SDGs 「誰も置き去りにしない」から考える、地域コミュニティにできること～

金沢市、2017年11月23日



OUIK では SDGs を地域で推進するための社会的対話の一環として LGBT と教育に関するフォーラムを共催しました。

第1セッションの「教師という立場から考える、子どもたちが求めるもの」では、谷口洋幸氏(高岡法科大学)がモデレータを務め、冒頭に、LGBT の子ども達の置かれている現状を数値なども含め報告しました。現役小学校教諭で、自らゲイであることをカミングアウトしている鈴木茂義氏、地域の高校で LGBT への理解を促進する活動を行っている

洞庭澄子氏(石川県立金沢二水高校)、高校生に、性感染症や性の自己決定などの啓発活動を行なっている森田一矢氏(金沢大学医学部生)らが登壇し、LGBT の子どもへの個別配慮に加えて、彼らを受け入れる集団を育てることの大切さを指摘しました。

第2セッション「2020年を見据えた、スポーツ・文化を通じた教育のあり方」では、杉山文野氏(東京レインボープライド代表、元フェンシング日本女子代表)がモデレータを務め、スポーツと文化を通して LGBT の情報発信や理解促進を進めることが議論されました。馳浩氏(参議院議員/LGBT に関する課題を考える議員連盟会長)は、オリンピックやパラリンピックにおけるフェアプレイの精神が SDGs の包摂性に通じることなどを指摘しました。続いて、LGBT を題材としたサイト「やる気あり美」を運営する太田尚樹氏、かずえちゃん名で YouTuber として活躍する藤原和士氏がより多くの人に向けて LGBT の話題を発信する自身の活動を紹介しました。

総括セッションでは、「地域における SDGs x LGBT —市民の学びの場づくりとは—」として、先の2つのセッションで指摘のあった点をどのように北陸、金沢にあったアプローチで解決できるかを多様な立場から論じました。岩本健良氏(金沢大学)の話題提供では、調査などから北陸は全国的に見ても LGBT に対して閉鎖的な地域であること、しかし大学や教育現場などでの制度的な変化が少しずつ現れつつあることが報告されました。河上伸之輔氏(金沢 JC)は、LGBT について、金沢 JC としても、自身の企業活動においても前向きに取り組んで行きたいと語りました。松中権氏(認定 NPO 法人グッド・エイジング・エールズ)は自身の体験を語り、主催する NPO による LGBT への理解促進のための啓発活動などについて紹介をしました。104 名の方がフォーラムに参加しました。



¹ LGBT とは、Lesbian (レズビアン)・Gay (ゲイ)・Bisexual (バイセクシュアル)・Transgender (トランスジェンダー) の頭文字をとった、セクシュアル・マイノリティ (性的少数者) を総称する言葉の一つ

◆ 金沢市の生態系サービスと地域社会のレジリエンス向上プロジェクト

Juan 研究員を中心として進める本プロジェクトは、金沢市に多く残る貴重な歴史的庭園から、同市の生態系サービス²の促進、保全、及び回復を目指します。金沢市の歴史的庭園は、美しい景観、住民の憩いや文化的交流の場、学習、都市の生態系保全、また観光資源としての高いポテンシャルなど様々な恩恵をもたらしています。これらの庭園を持続可能な形で活用し、確実に保全していくために、セミナーによる「座学と議論の場の提供」、見学や茶会の開催などの「庭園の文化的サービスの体験」、具体的な「管理活動への参加」としての清掃などの実施、など主に3つの活動を柱としています。2017年下半期には清掃活動を2回、見学視察を4回、セミナーを1回実施し、のべ100名以上が参加しました。実施においては、金沢市、日本造園学会石川県連絡会、金沢市内の大学、そして庭園オーナーの方々の協力を得て進めています。

² 淡水・食料・燃料などの供給サービス、気候・大気成分・生物数などの調整サービス、精神的充足やレクリエーション機会の提供などの文化的サービス、酸素の生成・土壌形成・栄養や水の循環などの基盤サービスがある。生態系サービスは生物多様性によって支えられている。

◆ 林鐘庭持続可能な庭園保全 ～都市の自然創出～ (2017年11月27日)

北陸大学のご好意と協力により非公開の林鐘庭でセミナーを開催しました。本セミナーでは金沢市のヒートアイランド現象に関する調査結果(円井基史氏、金沢工業大学)、庭園都市としての金沢市全体の空間構成と民俗学的考察(小林忠雄氏、北陸大学)、そして伝統的な日本庭園の設計上の特徴と庭園要素の関係性(鰐隆弘氏、金沢美術工芸大学)についてお話しいただきました。五人扶持の松を眺めながら、庭園の文化歴史的背景を学ぶとともに、庭園が位置する場所を金沢市全体の地形の中で捉え、都市の緑地が果たす役割について意見交換をしました。



◆ 心蓮社庭園を通じて考えるSDGs ワークショップ (2017年11月11-12日) ほか

アイダ・ママードゥア氏(金沢大学)と、同大学の留学生とともに心蓮社庭園の清掃と日本庭園がSDGsのゴール11(都市の持続可能性)にどう貢献できるかを議論するワークショップを共催しました。心蓮社庭園の茶室で小川慶太氏(北陸大学)による表千家の茶会が催されました。このほか、心蓮社庭園には国際シンポジウム「暮らしと自然と文化的景観」の参加者も見学に訪れました。また、10-12月に金沢市の様々な庭園(西田家庭園、玉泉園、寺島蔵人邸、千田家庭園など)を訪問し、千田家庭園では、庭園所有者である千田典子氏に煎茶・玉露式の茶会を開いていただきました。



◆ 千田家庭園の清掃と管理体制を学ぶワークショップ (金沢市、2017年10月10日)

金沢美術工芸大学の鰐隆弘氏とその学生達との協力により、明治期に造られた千田家庭園の清掃を行いました。庭園管理には定期的な清掃や手入れが不可欠ですが、現状では千田家庭園は所有者の責任で管理が行われています。しかし大掛かりな清掃は大変な負担を伴うことから、学生が庭園を学びの場として庭園を活用しながら清掃活動に参加できる仕組みを実験的に行ったものです。庭園清掃とワークショップを通じて庭園所有者の方が庭園の価値を再認識し、また学生と地域社会という、普段はあまり交流のない世代間の交流が生まれたことも副次的な成果でした。



◆暮らしと自然と文化的景観国際シンポジウムの開催（金沢大学地域政策研究センターとの共催）

金沢市、2017年8月27日

都市や農村の地域特有の景観は、住人の生業や地域の産業と深く結びついています。それらを文化的景観と考え、里山里海と呼ばれる能登の農村景観、金沢の伝統工芸と深くむすびついた都市景観を、人口減少や観光振興と両立させながら、これからどのように維持していくかを、アメリカのワシントン大学から



ケネス・ピーター・ヨコム氏、イタリアボローニャ大学からバレンティナ・オリオリ氏、そして東京工業大学土肥真人氏らを基調講演者にお招きし、各都市の文化的景観の保全政策について議論しました。OUIKからはJuan 研究員が、金沢市の日本庭園の新しい管理方法を通じて都市の持続可能性を模索するプロジェクトについて報告しました。そのほか金沢大学からアイダ氏、まるやま組の萩のゆき氏が輪島市三井での活動を紹介しました。



◆生物多様性市民モニタリングに関する勉強会

金沢市、2017年9月21日

OUIK は、金沢市域を対象とした生物多様性市民モニタリングに関する勉強会を開催しました。金沢市は金沢版生物多様性地域戦略を策定し、その中で金沢市の自然条件と工芸文化、食文化など独自の地域文化とのつながりに注目し、市民が営んできた生活文化とともに地域の自然を保全していく生物文化多様性の視点を提起しています。



OUIK も策定の支援に関わった同戦略には、市民とともに活動するためのキープロジェクトが策定されており、市民モニタリングを推進する市民ウォッチャープロジェクトもその一つです。市民ウォッチャーに今後さらに多くの人に参加できるデータプラットフォームを作るため、金沢市環境政策課と協力し、勉強会を開催しました。

勉強会講師には、須田真一氏（中央大学）をお迎えしました。須田氏は、中央大学、東京大学、パルシステム東京の協働による市民参加による生き物モニタリング調査（通称「いきモニ」）に昆虫学者の立場から参加し、東京の蝶のモニタリングを実施しました。コメンテータとして「いきモニ」プロジェクトでアプリ開発とデータプラットフォームを開発した東京大学 DIAS から生駒栄司氏、服部純子氏をお招きしアドバイスをいただきました。

冒頭、須田氏から、地域の生物多様性の保全には市民モニタリングが重要である背景説明と、東京での広範囲にわたる蝶のモニタリングに、多くのパルシステム会員の方が参加した仕組み、会員が楽しく続けられる工夫などを紹介いただきました。続いて金沢市環境政策課の武藤氏より、市民ウォッチャープロジェクトでこれまで報告のあった動植物データの紹介、そしてデータを投稿する人が限られていること、これからさらに多くの市民を巻き込んでいくための仕組みづくりが課題となっていることが発表されました。

勉強会には自然観察や環境活動を行う市民団体、大学研究者、行政官、市議会議員などが参加し活発な意見交換が行われ、「データがある程度蓄積されないと生物多様性に関する課題も見えにくいため最初から種を特定してモニタリングを行うことは難しいのでは」、「研究的な見地からはデータの位置情報が必要不可欠」、「成功事例の裏には関係者の努力があるはずで、東京の蝶モニタリングをそのまま移植しても成功するとは限らないのでは」、「もっと他の環境関連の事業とも連携が必要なのでは」などのご意見を頂きました。

2017年7-12月(下半期)の活動実績

7月

- ・ 白山開山 1300 年記念「山の日」シンポジウム(特別講演:飯田「白山ユネスコエコパークの意義と今後の可能性〜環白山の視点から」)郡上市 7月 7日
- ・ 第 4 回 東アジア農業遺産学会(ポスター発表:飯田「能登 GIAHS における生物多様性教育の現状と課題」、ユ一「マルチステークホルダーガバナンスメソッドを用いた生物多様性とその持続可能な活用のモニタリングと評価」)中国浙江省湖州市 7月 11-14日

8月

- ・ 第 2 回全国ユ一環境活動発表大会 国連大学サステナビリティ高等研究所所長賞スタディツアー(講演:飯田「国連大学の取組と生態系サービス」)金沢市 8月 1日
- ・ 北陸先端科学技術大学院大学 夏季集中講義「地域経営のための公共哲学」(非常勤講師:飯田)能美市 8月 7日~10日
- ・ 明和工業 Abe Initiative 研修生 SDG s ワークショップ(講義:永井「Local Platform Approach for Biocultural Diversity and SDGs」)金沢市 8月 31日、9月 27日
- ・ 金沢大学自然科学研究科環境技術国際コース 環境技術地域研修(講演:飯田「北陸地域の流域ランドスケープと地理」)砺波市 8月 29日

9月

- ・ ジェトロ・アジア経済研究所 専門講座「水産資源の持続可能なサプライチェーン-2020年東京五輪に向けた日本社会の課題」(講演:ユ一「水産物に対する日本の消費者行動と「里海」概念の活用」)東京都 9月 4日
- ・ 第 4 回 FAO-中国ハイレベル GIAHS 研修(アドバイザー参加:ユ一)中国北京市、内モンゴル自治区、山東省、広西省 9月 10-24日
- ・ 日本緑化工学会・日本景観生態学会・応用生態工学会 3 学会合同大会 ELR2017 NAGOYA(発表:飯田「歴史都市のグリーンインフラ:金沢市の用水網が有する多様な生態系サービス」)名古屋市 9月 23日
- ・ ABE Initiative 金沢市 9月 27日
- ・ 第 30 回巨木を語ろう全国フォーラム石川・金沢大会(講演:飯田「トチノキ巨木林の生態系サービスと山村の地域づくり」)金沢市 9月 30日

11月

- ・ 世界農業遺産若手実践者の相互交流会(講演:飯田「能登地域における生物多様性保全・活用の現状と課題」)能登町 11月 9日
- ・ 日韓交流ワークショップ:森林と林業の現状と将来(話題提供:飯田「森の産業創造と「地域産業体」モデルの可能性」、ファシリテータ:飯田)金沢市 11月 13日
- ・ 台湾東華大学資源講座台湾花蓮県 11月 14日、台湾林務局国際里山里海イニシアチブ交流ワークショップ台北市 16日、屏科大農学第八回熱帯林業研究会-山村振興と新時代の林業経営 17日屏東県(講演:ユ一「SATOYAMA イニシアチブ、GIAHS と能登の里山里海」)
- ・ 世界農業遺産 FAO によるブラジル人東京研修(ユ一) 11月 27日、能登研修(ユ一、永井) 29日~30日、意見交換会(ユ一、永井、飯田) 30日

12月

- ・ 世界農業遺産スタディツアー in いしかわ マレーシア・サバ州政府関係者研修(講演:飯田「世界農業遺産の概要」、コメンテータ:飯田)金沢市 12月 11日、14日
- ・ 日本外務省第 4 回海洋法に関する国際シンポジウム「大陸棚限界委員会(CLCS)設立 20 周年:成果と課題」(パネリスト:ユ一)東京都 12月 14日

新スタッフ紹介 小山明子

英国インペリアル・カレッジ・ロンドン動物学部卒業、保全科学修士課程修了。環境コンサルタント会社や小笠原の自然保護員の経験を経て、フリーランスで翻訳業務などに携わる。

2015年より能登に拠点を移し、2016年には国連大学の調査研究を業務委託で支援。同年より金沢大学の里山里海マイスター育成プログラムの業務にもパートタイムで従事している。2017年より、能登在住の国連大学研究員として能登の生物文化多様性や GIAHS 関連業務に携わる。横浜市出身。

出版物紹介

金沢市は 1987 年からホタル生息調査を継続して実施。OUIK は、2017 年 11 月に 30 周年を記念した「金沢ホタルマップ 30 年のあゆみ」を金沢市と共同発行(企画編集・執筆:飯田研究員)。

<http://www4.city.kanazawa.lg.jp/data/open/cnt/3/13112/1/kanazawahotarumap30noayumi.pdf>



発行 2018年1月

国連大学サステナビリティ高等研究所いしかわ・かなざわオペレーティング・ユニット

〒920-0962 石川県金沢市広坂 2-1-1 石川県政記念しいのき迎賓館 3 階 Tel: +81-76-224-2266 Fax: +81-76-224-2271

Email: unu-iasouik@unu.edu URL: www.ouik.unu.edu

Find us on Facebook! <https://www.facebook.com/OUIK.UNU.IAS>